

第11回

博報教育フォーラム

レポート Hakuho Education Forum Report 2014



～ちがっていること。ともに生きること。～



博報教育フォーラムは

優れた教育実践のエッセンスを体感できる場を提供します。

優れた教育実践には、広く他の教育現場で新たな価値を生み出すためのエッセンスが含まれています。このフォーラムは、教育の新しい潮流となりうる旬のテーマと優れた教育実践の事例を選び、様々な立場の参加者が共に考えを深めて意見交換をする場を提供することを通して、優れた教育実践を他の実践現場へ拡大・波及させることを目的としています。

第11回 博報教育フォーラムプログラム

1 事例発表

「博報賞」受賞者が活動事例を発表します。教育界に風を吹き込んだユニークで優れた実践を、フォーラムのテーマに沿って、別の観点から眺めるとどうなるか？魅力的な教育モデルだけでなく、子どもたちへの教育実践者の熱意が伝わってきます。



2 基調講演

教育界から注目を集める専門家による、テーマを俯瞰した講演です。フォーラムのテーマを学術的視点や実践的視点など広い視点で捉え、テーマの意味や課題の整理、問題提起、解決の糸口の提案などをしていきます。



3 ポスターセッション

事例発表者が特設ブースで活動事例を展示報告します。事例発表、基調講演の後、展示されたポスター、子どもたちの作文、実践カリキュラムやオリジナル教材を手に取りながら、テーマをより深く考え、理解し、実践的なノウハウを吸収する、参加者と発表者、参加者同士のネットワークづくりの場です。



4 パネルディスカッション・グループセッション

事例発表や基調講演で提示された様々な要素を、パネルディスカッションやグループセッションの中で、整理したり、深めたりしながら、参加者一人ひとりがテーマをより主体的に考える場です。パネリストによるクロス討議に会場も巻き込みながら、考えを深め、触発し関連事例の追加提示などもしていきます。





第11回博報教育フォーラム

～ちがっていること。ともに生きること。～

命あるものは、その多様性の中にこそ次への適応や発展の可能性を持っているといわれます。人もまた、刻々成長します。

子どもたちが、驚くほどさまざまな輝きに満ちていることは、日々接している方々が誰よりも感じているのではないのでしょうか。

ちがっていることのすばらしさ。お互いを尊重しながら、ともに生きていくことのすばらしさを、ご参加の皆様とご一緒に考えました。

Case.1

地域支援ネットワークに支えられた 特別支援教育

ユニバーサルデザインの考えによる分かる・できる・楽しい授業づくり

福島県 三春町立三春小学校

特別支援教育コーディネーター 斎藤 忍 / 研修主任 関 剛男



人口1万7,000人ほどの小さな城下町に位置する三春小学校は、平成17年度、文部科学省よりコミュニティ・スクール「学校運営協議会」の指定を受け、「子どもは町の宝！」を合いことばに、地域ぐるみの教育に取り組んでいる。同校の特別支援教育は、こうした気風に支えられているという。

一人ひとりの笑顔を 失わせないために

【斎藤】 当校の特別支援教育においては、「これが苦手だから、通級したい」と児童本人の希望により、通級につながったケースも少なくありません。支援ニーズを持つ児童が多数在籍する本校では、幼稚園・保育所で健やかな成長・発育を遂げた子どもたち「一人ひとりの笑顔」を、責任をもって中学校へつないでいくことを目標としています。

しかしながら7年前、私が本校へ赴任した際には、二次障害を起こしている児童、登校しづりや保健室に登校する児童もいました。そこで、幼保小をはじめとした関係機関との「顔の見える」連携と、支援策の引き継ぎの必要性を考えたのです。

1つ目として、「保健センターとの連携」。「5歳児発達相談事業」（5歳児健診）を実施している同センターと日々の情報

交換を行ない、さらに健診後のフォローアップ事業（親子教室等）に参加するなど連携を図ることにしました。学校が早期よりお子さんと保護者と直接関わることで、就学へ向けての情報提供や就学後のフォローアップが可能になっています。

2つ目は「教育委員会との連携」です。三春町教育委員会では「特別支援教育関係担当者会」を年に3回開催。5歳児健診を核とした情報の共有の他に、お子さんの行動観察や保護者との個別教育相談を実施し、第3回目の担当者会では、「個別の支援計画」をもとに幼保小中間で引き継ぎが行われます。さらに本校が保育園を参観し、次年度の学級編制や個別の指導計画等の作成に役立てています。

3つ目が、「田村地方特別支援教育推進連絡会（サポネット田村）との連携」です。（近隣の1市2町を合わせた）田村地区に、三春町からも、教育委員会や特

別支援教育関係担当者、保健師等が参加し、広域的な連携と支援体制の整備を図っています。

卒業に向けての小中連携においても、地域のネットワークを大切にしています。三春町には小中連携連絡会があり、卒業前からの情報の共有が可能です。

関係者が互いに顔を知り、つながっていることが、保護者が安心する子育てにつながっていることを実感しています。みんなが輪になって、子どもとご家族を丸く囲んで支援をつないでいく。こうしたネットワークづくりにより、多くの児童は入学と同時に適切な支援が受けられるようになりました。

しかし、子どもたちが学校生活で多くを過ごす学籍級においては、子どもの数だけ学び方があります。それぞれに得意・不得意を持ち、さまざまな援助を必要としています。

ここから、研修主任の関にバトンタッチします。

ユニバーサルデザインの 学級・授業づくりへ

【関】 本校の副主題は、「ユニバーサルデザインの考えによる学級・授業づくり」。子どもたちが安心

8つのポイント

- ① 教室環境の整備
- ② 教室環境の視覚化
- ③ 言葉ルールの確立
- ④ 行動ルールの確立
- ⑤ 子どもを多面的に見る
- ⑥ 子どものよさを見いだす
- ⑦ 子どもとのふれあいを大切にする
- ⑧ 人間関係づくりを積極的に行う

6つの視点

- ① 見通しを持たせる工夫
- ② 板書と机間指導の工夫
- ③ 話し方の工夫
- ④ 視覚化・動作化の工夫
- ⑤ 個の特性に合わせた学習課題、学習形態の工夫
- ⑥ 学び合い(言語活動)の工夫



【支援ファイル】

学年が上がり担任が替わるたびに支援が振り出しに戻ることはないよう、「支援ファイル」が活かされている。

して学べる環境をつくり、主体的な学びを促し、確かな学力を身に付けさせようと、「ユニバーサルデザインの学級づくり8つのポイント」と「ユニバーサルデザインの授業づくり6つの視点」を与えています。

8つのポイント (上・図表)

- ① 黒板の周りの掲示物をカーテンで遮ると、注意集中が困難な子には効果的です。
- ② その日のスケジュールをホワイトボードに提示しておくことで、一日の見通しを持つことで子どもたちは安心します。
- ③ 「ありがとう」「だいじょうぶ」等、“あったかことば”を意識させます。
- ④ 正しい姿勢は集中力を維持する基本ですが、授業中あえて席を立たせる場面をつくることも1つの手だてです。
- ⑤ 3つの学校用ファイルで、さまざまな記録を累積しています。
- ⑥ 子どもたちの良いことばや行動はタイムリーに褒めることを心がけています。特別支援学級の先生方は、とても上手です。
- ⑦ 休み時間に積極的に子どもと触れ合い、子どもの誕生日に担任がメッセージを送ることも。
- ⑧ 仲間づくりのエクササイズや、

意図的な班づくりをします。

6つの視点

- ① その時間の授業の流れをホワイトボードに示したり、タイマーで終了時間の目安を持たせます。
- ② シンプルで構造化された板書、意味付けされた色の使用は子どもの思考を助けます。
- ③ 抽象的なことばの概念がとらえにくい子は簡潔で具体的な指示が必要。何より、肯定的な表現は子どもたちを前向きにします。
- ④ まず視覚化です。音楽では、音階を色分けして表しました。



国語科では「気を失う」登場人物の心情にせまろうとしました。

- ⑤ 基本プリントとともに発展プリントを用意し、早くできた子、意欲の高い子へ対応します。
- ⑥ 子ども同士の学び合う時間を確保します。

「個」を見つめることが ちがいを認めること

次に「個への支援」について

お話しします。授業をユニバーサル化していく基本は、個を見つめる視点です。「単語を組み立てる音の処理に困難さ」を抱えている子には、多層指導モデルMIM（国立特別支援教育総合研究所開発の教材）を活用したり、「聴覚的な処理能力に困難さ」を持つ子には、絵や写真、動画、模型等の具体的な視覚情報を提示したり、「書くことに抵抗感・困難さ」を持つ子には、なぞり書きをさせたり、ワークシートで書く量を調節したりすることが有効でした。他にも、「自己欲求のコントロールに困難さ」を持つ子には、教室の後ろにタイムアウトエリアを設けました。



「文章中から文節を瞬時に検索することが困難」であれば挟み読みを。

子どもたちには、一人ひとり、それぞれに個性があります。互いのちがいを認め合いながら、ともに学び、ともに育っていく、そのような学び舎をつくっていきたくと思っています。一人ひとりの笑顔のために。(拍手)

Case.2

「ダブルの教育」への挑戦

“We are all STARS!!”

* * *

沖縄県 NPO法人アメラジアンスクール・イン・オキナワ
理事 野入 直美 / 教員・卒業生 セイヤー・エドワード



“アメラジアン”とはアメリカ人とアジア人の間に生まれた人のこと。アメラジアンスクールは、1998年、アメラジアンの子を持つ5人の母親たちによって、沖縄県宜野湾市に設立され、アメリカと日本、それぞれの言語や文化を教える「ダブルの教育」を行っています。

“ハーフ”じゃなくて、“ダブル”の誇りを

【野入】米軍基地が集中している沖縄では、年間300人ほどのアメラジアンが生まれています。アメラジアンスクールは、学んだ日数が地域の公立学校の出席日数になるという民間の施設。英語と日本語による教育を行っています。

アメラジアンとひとことでいっても、外見もさまざまでバックグラウンドもいろいろです。最初にパッと日本語が出てくる子もいれば、「英語で話すほうが好き」という子もいます。本校は、「ハーフ」と呼ばれることの多かった子どもたちに、「ダブルの文化、ダブルの誇りを育みたい」と考えたお母さんたちの願いが込められ、日本とアメリカ、どちらの社会でも活躍できる人間に育てたいという理念で運営をしています。

見学に来てくださる方は、「英

語と日本語がどちらもペラペラって、いいね」と言ってくさるのですが、子どもにとって英語は、心の中のドロドロしたこと、一番奥深くにあることを素直に表現するための大事なことばという意味合いもあります。自分を肯定的に受け止める自尊感情を育もうというのが、スクールの一番大切な目的です。

「なにじん？」と問われ戸惑う子どもたち

中学生クラスの学習で、アメラジアンについてのドキュメンタリービデオを制作する取り組みがあり、その作品を携えて地域の学校や大学と交流をしました。そのとき本校の生徒が大学生に、「どうして初めて会ったときに『なにじん？』と聞くのですか？」と質問し、大学生はうまく答えられなかった。「仲良くなれるかなと思って近寄っていくと、『なにじん？』と言われてびっくりする」と。こ

いった声を聞いて、取り巻く私たちも変わっていかないとけないなということを考えさせられました。

胸を張って“私はダブルです。”
と思って欲しいです。
私たちは恵まれています。

(中略)

“アメラジアンでいることは
マイナスな事ではない。”
自分に自信を持ってください。

1人の卒業生が在校生に残したメッセージ(抜粋)

アメラジアンを囲い込んで地域との交流に扉を閉ざしているのではないと言われることもありますが、自分に自信を持った上で、たくさんの人と出会えるように、アメラジアン同士で学ぶ体験というのを積ませたいと考えています。小学校課程は、英語による授業が8割、日本語が2割。中学校課程では半々になり、オリジナルのカリキュラムもあります。卒業後はほとんどが公立高校に進みますが、沖縄県には海外帰国生徒枠が入試枠でないことなど制度的に解決しないといけな課題も残っています。

ダブルのカリキュラムの一例として平和学習をご紹介します。沖縄戦では日系米兵が活躍しま

残酷な言葉が満ちていても ("Paint" リサ・バーンズ)

Look at my eyes.	(直訳)
They're black.	私の目をみて
Please, could you paint them yellow?	目は黒い 黄色に染めてくれない?
My Heart is a Dark sky, Full of cruel words.	私の心は暗い夜 残酷な言葉でいっぱい
Paint my darkness Red.	私の暗さを赤に染めて
My blood is mold. I feel so cold.	私の血はカビのようで冷たい
Please, somebody Paint me Green and Orange.	誰か、私を緑と橙色に染めてください。
Paint every inch Of my body 'till awake.	私が目覚めるまで、 私の体の隅から隅まで染めてください。

英語で書かれた子どもの詩。(日本語はスタッフの翻訳による)



自分たちでつくった映像は DVD 販売し、スクール運営費の一部に。

した。両親は沖縄生まれ沖縄育ち。アメリカで二世として生まれ、戦争では日系米兵として従軍し、沖縄に連れて来られて、「戦場でおじいさんに会ったらどうしよう」といった葛藤を体験します。(こういった歴史から)「ダブルにとっての平和」を学習していますが、それはアメラジアンの子だけが学ばばいいということではないと思います。広く地域と共有したい、「交流から発信へ」という思いで進めていきたいと考えています。

この後は、アメラジアンスクールで生徒として学び、地域の公立高校に進み、今はアメラジアンスクールで教師をやっているエディにバトンタッチします。

廃材の机や椅子でも 2言語で学べる喜び

【エディ】アメラジアンスクールの開校は市の就労センターの一室でしたが、すぐ後に民家を借り、小さな部屋に白板を付けて教室にしました。キッチンまで教室でした。私は小学校3年生でしたか。ベンチを机にしてギュウギュウ詰めでしたが、「(それまでの学習言語の)英語で勉強できる！」というのがう

れしくて。

高学年も廃棄物を集めて机や椅子に代用、使わなくなった教科書をいただき授業を進めていました。教室や教科書が汚れていても、「英語を学べる！」という喜びがありました。



開校当時の高学年クラス

日本語を教えてくれるボランティアもいましたが、2001年には県から日本語教員が派遣され、週に4時間、国語を勉強することができました。いまは新しい施設を宜野湾市から借り、きれいな教室で揃いの青いシャツで、新しい机で勉強することができるようになりました。

中学校卒業後、私は日本の県立高校に進みました。沖縄「訛り」で日本語が苦手、国語は苦しましましたが、なぜか英語の得点より化学の得点が高くて。(笑声)

(高校生の)17歳から英語を教え、卒業後3年間、通訳の仕事をしてアジア中を飛んでいま

した。最近の仕事で、舞台の脚本を英語から日本語に訳したときは、舞台を観た友だちから「(訳者としてエディの)名前があったね」と言われて「2つのことばを学んでよかった」とうれしく思いました。

いま教師をやっていますが、(スクールは)日本語のレベルの異なる子が大勢いて、JSLや一对一の授業もあります。さらに、IT教育も充実し、Word、Excel、グラフィックデザインや、ウェブサイトをどうやってつくる等のカリキュラムまで。

グローバル化が進んでいる中、両方の言語や文化を知ることによって多くの機会が与えられ、いろいろな場で活躍できるようになりました。卒業生の中には、日本語ができるので米軍で通訳者として重宝される子、仕事で高い地位についた後輩、基地内の大学に通いながら琉大に通っている子もいます。

生徒と関わりながら「ダブルの教育」を進める中で、「英語と日本語の両方を学べる環境は本当に大事だよ。あなたたちの将来はとっても輝いているよ」と伝えていきたいと考えています。(拍手)

Case.3

日本の教育で「生きる力」を育むための具体策と実践

～ ESD をふまえて～

東京都 江東区立八名川小学校 校長 手島 利夫



「ESD」とは「Education for Sustainable Development: (持続可能な開発のための教育)」の略で、ユネスコが取り組んでいる課題。「そもそもなぜ学ぶのか」に遡り、時代の背景や取り巻く環境に目を向けようとするESDの理念は、子どもたちの「生きる力」を育てようとする日本の教育現場でも広がってきています。

子どもたちに授けたい時代を「生き抜く力」

放射能の問題も解決されず、温暖化も深刻化していく中で、子どもたちが生きていく世の中は一段と厳しさを増しています。

またIT化が進む中、子どもたちが大人になったとき、様々な仕事が無くなるともいわれています。その上グローバルな労働市場で生きていかななくてはならない彼らに、求められている能力とはどのようなものでしょうか。それは問題解決能力、コミュニケーション能力、健康や体力、つまり学習指導要領でいう「生きる力」そのものだと思います。ただ生きるのではなくて、厳しい時代を生き抜く力なのです。

「生きる力」の教育は、「持続可能な社会を構築する担い手づくり」そのものであり、つまりESDの目指す教育なのです。これは、ユネスコスクールだけがやればいいというものでなく、日本

の課題、世界の課題でもあるわけです。しかし、ほとんどの学校に「生きる力」を育てる具体策はありません。そもそも生きる力の時間などないわけですから。

だから、教育課程こそが重要なのです。教科横断的な学び、総合的な学習の仕方というものを大事にしていくことが必要です。また、これに取り組んでいくと、先生たちの教育観、指導観も変わってきます。教師としての資質の、一番大事なところが向上していくと思います。

多文化理解を促進し世界と問題を「共有」

持続可能な社会をつくるには、どうしても環境の問題が重要です。しかし、これは我が国だけの問題ではありません。世界の国々と問題を共有化して、国境を越えて協力し合っていかなければいけないのです。

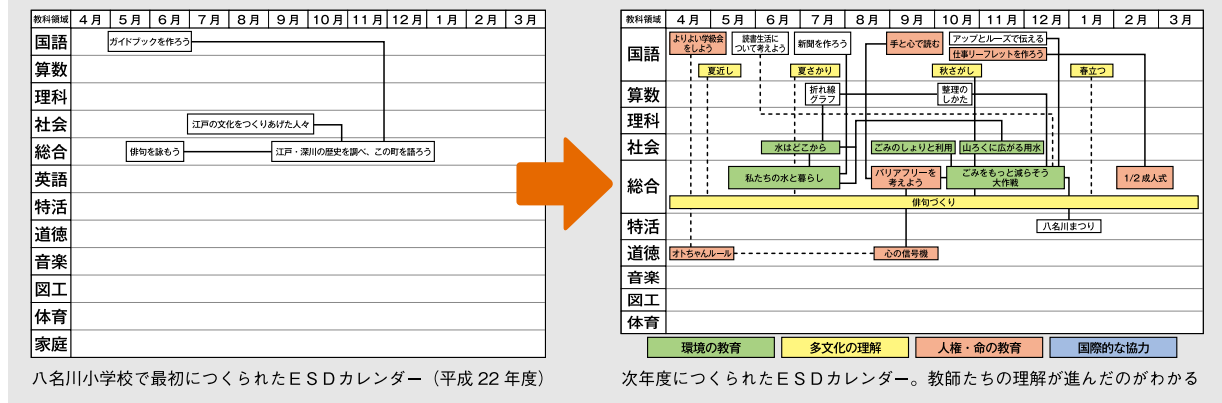
ベースになるのは、互いの文化や生き方を尊重し合うという

多文化理解の考え方であり、互いの生き方や生命を尊重し合う人権や命の教育であり、力で誰かをねじ伏せるのではなくて、認め合って、新しい時代をつくっていく民主的・共創的な学びのスタイルなのだと思います。

“4つの視点” ①環境、②国際的な協力体制（システム）③多文化理解、④人権や命で色分けした「ESD カレンダー」（図表①）の中の、それぞれの教科領域に散らばっている同じ色の枠をつなげてみると、学習の流れが見えてくるし、一目でどういうことをやるのかがわかります。白い枠の部分は学習スキルで、これも重要です。うまくほかの学習に取り込んで、まとめたり、伝えたりすることに活かしていけばいいわけです。

今年、このESDカレンダーを総合的な学習の時間にうまく活かせないかと考えました。「多文化の理解」と「国際的な協力」を一緒にして「国際理解や協力」に、さらに、インタビューの仕方（国語）や、整理の仕方（算数）、情報教育などを「学習スキル」にしてしまえば、学習指導要領の解説の項目はみんな、うまく入ることがわかってきたわけです。（図表②）

図表①



また、自分たちが取り組んでいるのは、どの分野か、どんなことをやろうとしているのかを意識すると、「この部分が足りないな」といったようなことも見えてきます。さらに、先生たちは地域人材との連携も書きこんでくれました。（図表③）

これが完成したら、どの学年を受け持っても大丈夫。去年のワークシート、素材を少しずつ変えて、今年の実態に合わせたものにつくっていけばいいのです。

授業のあり方も、教え込まれるのではなく、「これについて知りたい」と問題意識を持っていれば、そこに向かって探究が続いていくわけです。先生たちにも「子どもの学びに火をつけ

られる先生になろうじゃないか」と呼びかけ、子どもたちとどんな良い関係が生まれています。

保護者と地域の意識も変わった

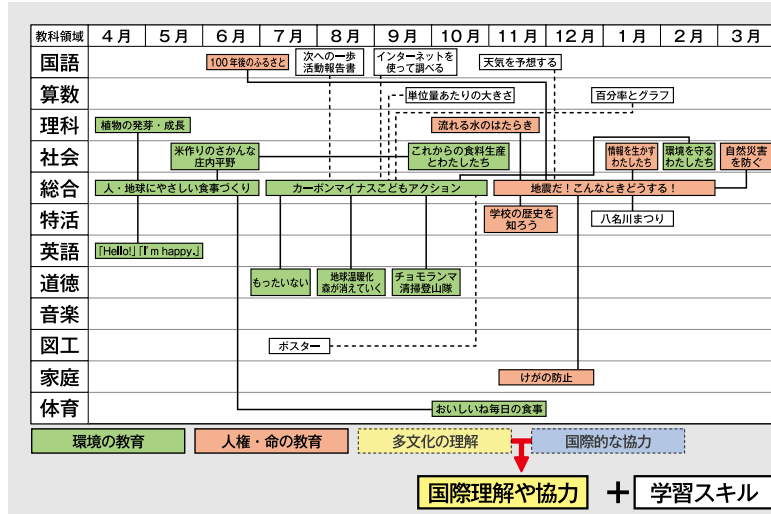
発信力もつきます。例えば「伝え合う」場面を全校で設定すると、プレゼンテーション大会のようなものができて、1年は1年なりに、2年は2年なりに、6年になれば積み重ねの上で、素晴らしい表現力で発信することができるのです。

保護者にもどんどん公開しています。「保護者同士が信頼し合い、地域の一員として誇りをもち活動していくことが大切なサポートだと実感。ユネスコや

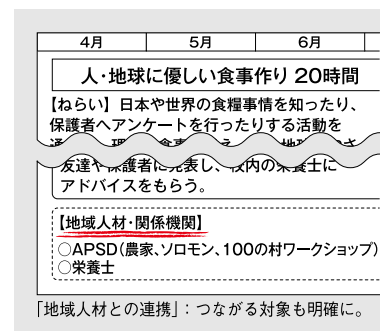
世界は遠くにあるのではなく、世界の中に八名川があって、子どもたち一人ひとりと世界がつながっている視点を持つことが大事と思った」と感想も寄せられ、保護者・地域も「参観から参画へ」と変わってきました。

全国学力学習状況調査の結果「自分で課題を立て、情報を集め、整理し、調べたことを発表する」といった問題解決的な学習のあり方、総合的な学習の実践をやっている学校では、やっていない学校より学力も十数ポイント勝っているデータがあります。にもかかわらず、まだ「ドリルを何回も繰り返すことが大事」と言っている人たちに、それだけでいいのですかということと言わなければいけないと思います。ESDの視点を活かし、総合的な学習の時間を充実させることが大事なのです。（拍手）

図表② ESD カレンダーを進化させた「生活・総合カレンダー」



図表③「総合的な学習の時間」指導計画書(抜粋)



Keynote.1

教室の中の多様性・ 地域の中の多様性

「共生社会」の実現に向けたパラダイムチェンジ

国立特別支援教育総合研究所 上席総括研究員(当時)

筑波大学 教授(現職)

柘植 雅義

■プロフィール

国立特別支援教育総合研究所勤務を経て、2014年4月より筑波大学教授(人間系 障害科学域 知的・発達・行動障害学分野)。近著に「特別支援教育—多様なニーズへの挑戦—」(中公新書)等。



内閣府が提唱する「共生社会政策」への議論が活発化しています。「国民一人ひとりが豊かな人間性を育み、生きる力を身に付け、みなで子どもや若者を育成・支援し、年齢や障害の有無等にかかわらず安全に安心して暮らせる社会」の実現のために、教育現場の挑戦が始まっています。

「不揃い」から学ぶ 多様性の強み

宮大工・小川三夫さんの『不揃いの木を組む』という本には、法隆寺や薬師寺の塔は、不揃いの材が一本一本支え合って「総持ち」で立っていると書かれています。「均一」は理想的に見えて、実は「幅がない」という論調で綴られている本です。



《参考書籍》
不揃いの木を組む
小川三夫 文春文庫

「不揃いでなくちゃあかんのや。いいのもある、悪いのもあるっていうのがいいんだ」。法隆寺最後の宮大工の、鋭い視線が興味深い。

続いてIBM創設者・ワトソンの名前を冠した研究所の話。かつて10%ほどの研究者は、「江戸時代の日本の油絵の塗り具合」や、「ナイル川の水位をどう測るか」等、本業と関係ないことを研究していたといいます。同様に、意図的にちがう仕事をす

ることで人と組織が育つと説く「グーグル・ルール」も、IT関係ではよく知られているようです。

あるいは「豊かな地球環境であり続けるために、生物多様性は欠かせない」といったバイオダイバーシティ(biodiversity)といった言い方もあります。多様性は、強さや、しなやかさ、持続可能性のベースになるため重要といわれます。

では「共生社会」とは何かというと、障害のある方などが、「積極的に参加、貢献していくことができる社会」、つまり、障害のあるなしに関係なく、「人権が尊重されて、思う存分生きていける社会」ということ。教育の中でも「インクルーシブな教育」を目指すると、中央教育審議会等で今年度から動き始めています。

ここで注意しなければならないのは、「ともに学ぶ」ということ。つまり、それぞれの子どもが授業内容を把握し、達成感を持って充実した時間を過ごして

いるかが重要で、一緒にいても、そうではない状況より生きる力が得られない、あるいは半分の子どもが犠牲を払っている状況になってしまったら、まずい。だから、そういった状況も含めての「ともに学ぶ」ということを大事にしなければいけないといったことが、中央教育審議会の報告書にも書かれています。

「ニーズ」に応えて 「カスタマイズ」が

近年の幼稚園、小・中学校、高校、大学は多様性に溢れています。通常の学級で学んでいる発達障害のお子さん(6.5%)に、特別支援学級や通級等(2.9%)を足すと約10%、10人に1人が支援の対象ということになります。(下表参照)

小中学生段階の児童生徒の多様な実態

〈特別支援教育〉

- 小中学校の通常学級に
在籍する発達障害 …………… 6.5%
- 通級指導教室、特別支援学級、
特別支援学校 …………… 2.9%

そんな中、どのように教育を展開していくのかということが、いまの教育の最も重要な話題の1つですが、現状は、多様性に気が付いていない方もいるし、気が付いていても「面倒くさい」

ハートレー・ディーン博士による「ニーズ」の定義の中には・・・



“教育的ニーズ”がない!?

《参考書籍》
「ものづくり」の科学史
橋本毅彦 講談社学術文庫



ものづくりを通じたカスタマイズとスタンダードの関係性から学べることも多い。

とか、方法がわからない、あるいは工夫しない、努力しないという状況もある。また、余裕が無かったり、多様性を楽しむことができていないのかもしれない。

特別支援教育は一人ひとりの教育的ニーズを把握して適切な指導・支援することですが、実はわれわれも、ニーズということばを、まだ十分わかっていません。ロンドン大学のハートレー・ディーン博士は、ニーズをさまざまに定義していますが、その中に「教育的ニーズ」は入っていないのです(上・図表)。どうやら教育や時代を解く1つの重要なキーワードは「ニーズ」、つまり「多様なニーズ」といわれていますが、まだ研究途上にあることがわかります。そのような中で、特別支援教育というのは、重要なアイコンが「ニーズ」というわけですね。

アメリカの「ノードストローム」というデパートでは、世界で初めて、一人ひとりの顧客ニーズに対応して販促を考え始めた。ここで「カスタマイズ」という考え方が本格的に世の中に出てきたわけです。

特別支援教育というのは、一人ひとりのニーズに対応して指

導の設計図をつくって指導していくという、カスタマイズされた教育の1つといわれています。

また最近「2E (twice-exceptional)」ということばもありまして、障害があることが1つで、もう1つは、絵がうまいとか、計算は学年で一番といった特別な才能。障害があることも1Eとする認知と教育が始まろうとしています。

「多様性」は面倒くさいと考える方がいるかもしれませんが、「多様性があるって楽しい」というスローガンを打ち立てて、評価や検証を含めながら進んでいくという流れが、これから日本に必要だろうと感じています。

スタンダードを探り「枠組み」を見つける

今後は、多様性を理解して、30人が同じ場所にいても、一人ひとりに寄り添って、ニーズに対応していく方向にいくのだらうと思います。ただ、一方で、「標準(スタンダード)づくり」も、うまく重ねて動かしていかないとけない。

特別支援教育では、担当の先生はカスタマイズしながら頑張っているらしいですが、標準(スタンダード)化は担当する先生方の

力量や考え方に大きく左右されている。ユニバーサルデザインの授業も、いまのところは担当の先生にまかされているのです。先生方は「もう少しフレームが欲しい」と困っている。

2年後には「障害者差別解消法」が動き始めます。障害があることで、必要以上の差別をすると違法になる、まさに教室や学校の中の多様性をバックアップする法律です。ただし、その時に、どのように合理的配慮を提供していったらよいのかというスタンダードはありません。

ですから、ここ10年ほどは、個別性、カスタマイズというのがワークと教育の中でも進んできましたが、これからは逆に、標準化・スタンダードづくりとの折り合いが話題になってくるということです。

多様性は教室や地域を変えていく仕掛け。「チャンス到来!」と、これまでの教育をもう一層力強く変えることができる起爆剤と私は捉えたいと思います。

そして、多様性が当然のこととして大事にされる教育・社会を誇りに思うことが、ジワジワと馴染んでいくような社会につながればいいと思います。(拍手)

Keynote.2

「共生」の心理学

他者とかかわる存在としてのヒト

* * *

慶應義塾大学 教授 鹿毛 雅治

■プロフィール

2005年より慶應義塾大学教職課程センター教授。著書に「学習意欲の理論：動機づけの教育心理学」（金子書房）、「子どもの姿に学ぶ教師—学ぶ意欲と教育的瞬間」（教育出版）など。



カメレオンは状況に応じて自らの色を変えることができますが、この「カメレオン効果」を、人間も持っているということが明らかになっています。同じ場にいる人の行動を無意識になぞり、さらには、真似をしたりされたりした相手に対する好感度が高くなるのが、社会心理学等でいわれています。

気持ちやしぐさは
場の共有で伝染する

人の本質、つまり人とはどういった存在かということについて、大きく3つの話をしたいと思います。

まず、「共感する人」。これについては「感情の伝染」という現象が明らかになっています。例えば赤ちゃんやスポーツ競技で活躍した選手の笑顔を見ると、思わずわれわれも笑顔になる。うれしい、快い気持ちが伝染する。しぐさだけではなくて内的な状態も伝染するのです。

社会心理学等では、「目標」も伝染するといわれています。例えば他者の視線や表情から、とても真剣な様子、つまり、何かに意識を集中する「やる気」を感じるとき、その意識がわれわれに伝染します。

人は他者の気持ちや感じ方に自分を同調させるような心理システムを生まれつき持っていて、

無意識のうちに発動させることもある。そのときに重要なポイントは、同じ場にいる、つまり場を共有していることが条件だという点です。

次に、「協力する人」について。まず、「わたしたち」モードということから話しますが、これは、例えば複数の人が1つの課題を共有して、熱心に取り組んでいるといった状況からわれわれが感じ取るある種の心理現象のこと。

例えば体育の作戦会議で、子どもたちが真剣に、自分たちのチームが勝つために生き生きと「協同」している。他にも、2人が一緒に同じものを真剣に観察するとき、2人の視線の先は重なっている。つまり、「わたしたち」モードというのは、「共同注意」なのです。

学者トマセロは本の中で、そもそもヒトというのは、共感するのと同様、協同する。そして、協同するのはヒトとしての特徴・本質であるといっています。

その背後の要素に「ゴールの共有」があります。例えばグループ学習では、グループ形態にしたからといって協同が起こるわけではない。少なくとも、グループの成員がゴールとルール（この場でどう振る舞ったらいいのか、自分は何ができるのかという役割の理解）を共有していなければならない。それが背後にあってこそ、「わたしたち」モードが姿として現れる。

協働

複数のヒトが、お互いのために、一緒に働くために、生まれてくる

「キョウドウ」を私はあえて「協働」とも書きましたが、人は共感・協同するために生まれてくるというのが、最新の心理学や比較行動学の知見です。

敵対する外集団と
ちがいを認め合う

でも、そうではない姿もたくさんある。協同しない、共感しない。その理由として1ついわれていることは「われわれ」と「彼ら」を区別すること。内集団



の中では共感・協同するけれど、外集団とは対立するのです。

例えばオリンピック報道では日本の選手ばかりが紹介されます。「内輪」では共感し協同するけれど、すばらしい技があっても、外集団の競技や選手については大々的には報道されません。これも人間の1つの姿です。

課題は、ちがいを乗り越えるということではないでしょうか。日本だけではなく、教育界のみならず、われわれの社会、すべての人が向き合っている課題。それをどう考えていけばいいのか。

パレスチナ人とイスラエル人の対立問題を取り上げた社会心理学の研究があります。パレスチナ人が「困難に直面したエピソード」をイスラエル人に語ったときの、イスラエル人の反応について。質問項目は「相手に対する信念や信頼はどの程度肯定的か」「パレスチナ人の家族に対してどれだけ共感するか」等。結果は、ビデオ映像で顔を見ながら交流したときに、文章だけのやりとりと比べて肯定的な態度に変化しました。対面対話条件が非常に重要だとわかります。

そこで、「利他的動機づけ」という話をしたいと思います。



場を共有して利他的になる

他者のために振る舞おうとする心理状態が「利他的動機づけ」、対して、自分のために振る舞おうとするのが「利己的動機づけ」。つまり、先ほどの「われわれ（内集団）」と「彼ら（外集団）」は、「自分か他者か」という対立に起因している。だから、「自分のために」というのと「他者のために」というのは対立するのです。そのジレンマの中で、自分を優先してしまうというようなことは、しかたないことでもあります。

そもそも利他性には、「寛容さ」「援助的」「情報伝達の（相手が困っていたら、役立つ情報を教えてあげようという気持ち）」の3つの要素があるといわれています。このような利他的な動機づけが発動するためには、先ほどの対面対話条件や「カメレオン効果」に共通する、「**場を共にする**」ということ。同じ場において、表情や気持ちを五感で感じ合うような体験が重要です。

同時に、「相手の立場に立つ」ということ。先の実験では、まさに相手の視点に立つ場をイスラエル人は提供されていた。そ

れによって共感が生まれ、ちがいを乗り越えるといった利他的な行動が起こり、結果、「気持ちを理解してくれた」「役に立ててうれしい」といったポジティブ感情が双方に生まれる。そのような心理プロセスを体験することが非常に重要だとわかります。

その際、ちがっていることが目に見えなければいけません。その上でポジティブ感情が随伴する繰り返しが実は重要で、そのことによって協同する習慣が形成されたり、共生することによって価値があるという態度・信念が学習されたりします。

つまり、ちがいに向かい合い、受け入れ、ともにいて「よかった」と感じ合えるような具体的な場を日常生活の中で繰り返し体験していくことが大事だと、心理学は教えてくれているのではないかと思います。（拍手）

そして、人は、「共生する」

「共生」する場を創る

「共に」という体験の繰り返し

直接的関わり

Face to Face

ちがっていることの可視化

ちがいに向き合う

ちがいを受け入れる

ポジティブ感情の随伴

協働の習慣形成

共生の態度形成

「多様性」から生まれるものは

3つの事例発表と2つの基調講演を受けて、会場はパネルディスカッションへ。登壇者と参加者が一体となって、「多様性」に関わる問いかけから始まりました。

コーディネーター



● 嶋野 道弘
文教大学大学院教育学研究科長

■プロフィール

2005年より文教大学教育学部心理教育課程・大学院教育学研究科教授に就任。文部科学省初等中等教育局視学官・主任視学官などを歴任。主著に『教育の精神と形』（教育報道出版社）、『これからの生活・総合』（共著東洋館出版）など。

●嶋野 はじめに2つの質問をしたいと思います。深く考えずに直感で、お手元の赤・青カードを上げて答えてください。

1つ目。「**ちがっていることでよかった**」という経験が強い人は青、「**ちがっているために困ったなあ**」という経験が強い人は赤。それでは、1、2、3、ハイ、お願いします。（赤・青のカード数をスタッフが数え、表に書き込む）どちらか一方的になるかと思ったら、「よかった（青）」が67、「困った（赤）」が50。大きな差は出ませんでしたね。

もう一問。「**ちがっている人がともに生きるということは面白いことだ**」と思う人は青、「**ちがっている人がともに生きることは難しいことだ**」と思う人は赤。ハイ。（結果は、青：赤＝131：26）これは大きなちがいが出ましたね。

●柘植 （この結果は）面白いと思います。経験では困った経験をされている方は結構多い。とはいいいながら、気持ちは「でも面白いのだよ」と感じている。

●鹿毛 （ちがいを）面白いことだと思いたいし、信じたいという、気持ちの表れかなあと思いました。私自身は、「ちがっていることでよかった（青）」を上げながら、「ともに生きることは難しいことだ（赤）」を選んだ。「前向きに」という方向性は共有したのですが、世の中を見渡して、果たして「そうかなあ」って。そんな簡単なことではないかなと。

●嶋野 その意味ではこの数字は、このテーマを会場がどう受け止めようとしているのかといったことを物語っています。非常に前向きで教育的な人が集まっている。

パネリストの方に伺いたいと思

います。子どもたちが「ちがっていること。ともに生きること。」ということについて、みなさんはどう受け止められたのでしょうか。

●手島 校長という立場で学校を見ているが、ほかの学校で「問

題児」といわれた子たちや、さまざまな問題にさらされて傷ついた教師たちが、当校では不思議と立ち直れるのですね。自分の道を見つけて元気になっていく。根底には、ESDという教育観があって、ちがっていること、それを乗り越えて、「ともにより良く生きるために、学んでいこうじゃないか」という問題意識を共有できる。その基本方針さえ揺るがなければ、当校のような学校はもっと増えるのではないかと考えています。

●北上田 アメラジアンスクールの生徒たちの多くは県立高校に進学するので、生徒たちを引率して高校の見学に行くことがあります。そこでは公立の中学生たちと一緒にいるのですが、みんなの「視線」が本当にイタイです。体育館に入ると、みんなが見る。しかも「見る」ということに対して無意識で、何かことを投げ掛けるわけでもない。そういった視線の中で生きていくことはやっぱり大変だと思います。

さらに、ある生徒が「将来の夢は官房長官になること」と言うのですが、日本国籍がない。ですから、「ともに生きる」と



パネリスト



● 手島 利夫
江東区立八名川小学校校長



● 北上田 源
NPO法人アメラジアンスクール・
イン・オキナワ中学校課程教員



● 太田 文枝
三春町立三春小学校校長



● 鹿毛 雅治
慶應義塾大学教授



● 柘植 雅義
国立特別支援教育総合研究所
上席総括研究員（当時）

いっても、いまの制度では将来の夢は実現できないという問題があって、これにどう対処していけばいいか考えています。

●太田 1人として同じということはない子どもたちが、集まり、切磋琢磨して磨き合い、成長するというのが、学校づくりの前提にあるかなと思っております。行き過ぎた画一教育は、好奇心や創造性を停滞させ、学習する喜びから子どもたちを遠ざけることになる。人は誰でも得意・不得意とするところがあって、ちがいがあって当たり前、そのちがいを生かしてこそ、個性溢れる児童・生徒の育成が図られると思います。

●鹿毛 「ナンバーワンではなく、オンリーワンである」という歌詞が有名になったように、「個性」が大事なことはみんな頭ではわかっているのですが、乗り越えるのはとても難しい。

哲学者のマルティン・ブーバーという人が、「私とあなた」と「私とそれ」のちがいを言っているが、いまの世の中は後者になってはいないか。

私の恩師が、「（駅のキヨスクで新聞を買うとき）お金を投げて、相手を見ないで、パッと取っ

ていく人が多いねえ」と言ったのですが、それは「私とそれ」の関係。働いている方を「それ」（物）として見ているし、誰がいても同じなわけです。先ほどの「視線がイタイ」（北上田先生）というのも、「私たちとそれ」、つまり集団としてラベリングをして、「アメラジアンが来た」みたいなことですね。

「ありがとう」と言われたとき、英語では「ユーア・ウェルカム」など返すことばがありますが、日本語の「どういたしまして」は少しハードルが高くて、せいぜい無言でうなずくだけ。他にも、あるお店では一生懸命、「いらっしゃいませ」、「こんにちは」と言い続けていますが、お客さんが来ても来なくても一緒、誰かに向けて言っているわけではない。われわれの足元で「私とそれ」の世界が展開しているのではないかと思います。

●柘植 教室の中の多様性について、大人側のことを考えたいと思います。約20年前のアメリカの論文ですが、学習障害（LD）を持っている教師は、障害がない教師よりも、同じ障害を持っている子どもに寄り添って、より良い教育がなされるだろうと

いう結論です。

最近、アスペルガーと診断された高校の教員の方は、「学校でカミングアウトして、非常に仕事がやりやすくなった」とおっしゃっている。その一方で、子どもを教える側も多様化しているのに、「あの人は一緒にできません」といった状況になっていないか。

多様化してきている大人側も、同時にどうするかを考えていかないと、子どもたちの多様性に入っていけるのか悩ましいと感じています。

●嶋野 私は今日の事例発表と基調講演を聞いていて、共通のワードがあったと思いました。1つは、「笑顔」「輝く」など、前向きなこと。「ちがっていること。ともに生きること。」の奥には、肯定的にものを捉えるといったことが潜在していて、それが今日のテーマで、顕在化してきたのかなと。

もう1つは、「本当」「本質」。「そもそも人間とは」という人間論や、「共生社会の本質は何か」など、われわれ人間の本質、物事の本質を見るような、そういったことがテーマから引き出されてきたのかなと思います。



これからの社会を、生きるために

●嶋野 それでは、「さまざまにちがう子どもたちが、ともに生きていく」ためには、子どもたちは、「どのような力」を身に付けていけばいいのでしょうか。

●北上田 やはり「好奇心」が必要と思っています。「ちがいを乗り越える」ことは大変だし、面倒くさいけれど、それをどう楽しめるかということが重要かと。そのための「知的好奇心」。

アメリカンの子どもたちは日本語が苦手な子が多く、漢字や四字熟語は非常に難しいのですが、先の発表のエディ先生は、生徒だった時代に変な好奇心がありました。例えば四字熟語を教えると、すぐ使いたがり「先生、オレ、きのう、「五里霧中」だったんだよ」とか（笑声）。そうして使うことで、ことばを自分のものにしていく。

また、ある生徒は、「先生、ズケランって、どうやって書くの？」と。とても難しい沖縄の地名ですが（正解は「瑞慶覧」）、彼は自宅からスクールに来るまでの間に車窓から見える地名を全部書こうとしている。それによって自分が生きている世界の

意味がわかり、つながっていくのだろーと思いました。漢字の学習1つを取って見ても、どうやって自分とのつながりを意識できるかは、やはり好奇心が大きいと思います。

●手島 子どもたちはこの先、自分の知らない町に行き、知らない人たちと協力して生きていかなければいけない。そのとき、ふるさととの良さとか、生まれ育った町の誇りを子どもながらに感じ、自分の存在意義を感じ取ってもらいたいと思っています。

スウェーデンのオレブプロ大学の先生方は、「私たちは民主的な学び方そのものを大切にしているのです」と言っていました。それは、「民主主義とは何か」を教えることではなく、互いのちがいを認め合いつつ、より良い学びをつくっていきこうという民主的な姿勢を育てようとしているのです。そのような関係を大切にする社会をつくるのが、学びの1つのゴールなのだとも思うのです。

●太田 自分に自信がない子が多く、そんな子どもたちが友だちを愛せるかなと思います。ま

ずは「自己肯定感」を持てる子どもたちを育成していきたい。

●斎藤（太田氏の話を受けて）多数派の子どもたちに、ちがいのすばらしさを受け入れる価値観を持ってほしいと思っています。通級指導教室の（少数派の）子どもたちは、苦手なことはほんの少しなのに、自分を全否定してしまう。



そんな子に、（知能検査の結果を見せながら）「ここがちょっと苦手だけで、こういうところは平均以上の力を持っているんだよ」と説明をしてあげると、とても安心した表情をする。「ここは苦手だから、しょうがない」でも「ここは、いいね」と。子どもたちには「しゃあねえ、しゃあねえ」と「いいじゃん、いいじゃん」と毎日ことばのシャワーを浴びせて、自己理解、自己支援力を身につけさせてあげたいと思います。

もう1つは、困ったらヘルプサインを出す力、「わからない」



「できない」と言える力。「助けてもらえば、こういうこともできる」と自己肯定感を育んで、前向きに生きていく力を育ててあげたい。

●鹿毛 われわれは「自尊欲求」を持っていますが、それが満たされてこそ自己実現できると心理学者マズローは言っています。ただ、自尊心というのは高ければ高いほどいいのではなく、重要なのは「ほどほど」。

社会の側にある個人を評価する物差しも、かつて以上に画一化しているように思えてなりません。例えば学歴社会が崩壊したといわれながら、一部ではますます過熱化して点数で評価されている。

加えて、「コミユカ（コミュニケーション能力）」や「積極性」、点数以外の非常に強力な評価軸が社会で強調される中で、いくら「個性が大事」「オンリーワンになれる」と言われても、なかなか難しい状況があるなど。社会の側の基準はすぐに変えられるものでもないし、私が悲観的なのは、そういった理由が1つです。

では、どうしたらいいか。小学校から高校を見学していて、「いい授業だな」と思う授業の特

徴は、やはり子どもたちの姿に現れている。

朝の会で、ある子が昨日あった出来事をとうとうと語ることがあります。はたから見ていると何が言いたいかわからないけれど、ほかの子はうなずきながら熱心に聞いている。そして、話している子が黙り込んでしまうと、ほかの子が「ほんで？」と合点の手を入れたりする。いやあ、すごいなど。

それは、聞く力と語る力。個人の力ではなく、力というのは、「場」があって発揮されるものなのですね。私も2年間アメリカにいましたが、英語が苦手な、ネイティブの中で英語を話すのは、気おくれして、言いたいことが出力できない。そうになると、ますます英語が下手になる。では、私の英語力って何だということになると、つまり、ある「場」で発揮されるものの力。だから「力」と「場」はセットで考えなければいけない。



ですから、先ほどの学級は、聞いて「面白かった」とか、「あの子のことがよくわかった」とか、「僕もこれやってみよう」といった、聞くこととポジティブ感情が随伴している学級なので、それが繰り返されているから、「聞く」という姿勢が形成される。

そうすると、聞いてくれるから語りたくなる。うなずいてくれる姿に、また語りたくなるし、生き生きと語ると、もっと聞きたくなるという相乗効果が発生する。そういう場をどれだけつくるかということです。

●柘植 多様化する社会の中で必要なのは、「許す力」と「爪を出す力」だと思います。「自信」「自尊心」「自己肯定感」等の爪を出さないといけない。そもそもの爪があるかを見ついたり、爪を伸ばしたりを学校の中でやらなければいけないと思います。そして、「許す」ということ。「許す力」と「爪を出す力」の絶妙なバランスをうまくあいにつくっていくことが、多様化する社会の中で、みんなで生きていくために必要な1つの力なのかなと、みなさんの話を聞いていて思いました。

それぞれに 「ちがっていい」

「ちがっていること。ともに生きること。」を考えていくと、さまざまなキーワードが出てきます。グループセッションでは、参加のみなさんからたくさんのキーワードが集まりました。



●嶋野 (ホワイトボードに) 集まったことばを前に、次に、「では、どのような教育をしていけばいいのだろう」ということについてお話してください。

●太田 ユニバーサルデザインの授業は効果的で、そのためには学級が安心して生活できる場でなくてはなりません。本校のハンドボールの授業では、先生が「全員シュートでボーナス点」というルールを作り、さらに、「失敗した人を責めない」「あったかことばで応援する」「拍手をする」等、子どもたちに事前に指導しました。

これらの効果検証といえるかわかりませんが、本校で不登校はなく、特別支援の子どもたちも「学校が大好き」で、ほとんど休みません。

●北上田 アメリアンスクールという場所自体の重要性はあるだろうと思っています。「ちがっていること。ともに生きること。」は、このスクールでは、「ダブルの教育」をしようとしたときから始まっています。

ある中学3年生の生徒が、「(スクールでは) 日本とアメリカの先生と生徒、文化的な対立や衝突が起こるけれど話し合いで解

決する。なぜ大人の社会ではできないの」と。日々、ちがいが顕在化していく場所がアメリアンスクール。そこでしっかり考えることができるというのが、このスクールが存在する意味なのだろうと。同様な場所がもっと広がっていけばいいと思います。

●手島 私は、知識と理解中心の詰め込みの教育から、子どもたちが学びに燃える教育に変えていきたい。そのためには教科横断的なカリキュラムを備え、子どもたちの成長を通して職員も育っていく、そういった学校をつくっていかないといけない。子どもの成長する姿、認め合う姿を通して、「子どもの心に火をつけられるマッチ」を持っている先生を育てていくこと、それが日本の教育をよくしていくことではないかなと思います。

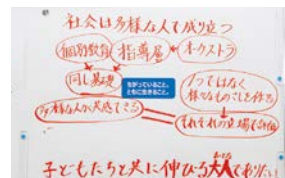
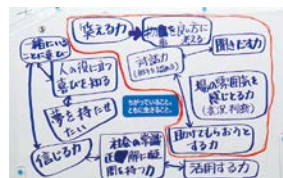
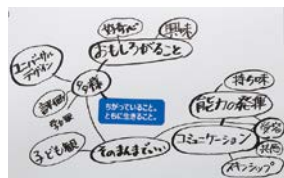
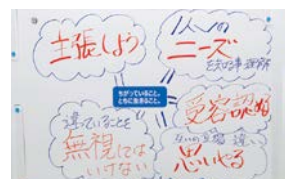
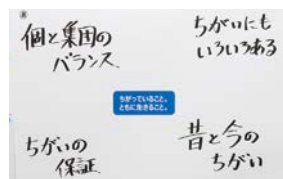
●嶋野 太田先生は「安心できる環境」、北上田先生は「場をつ

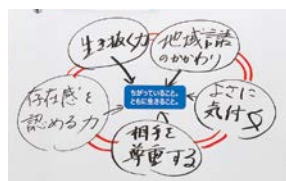
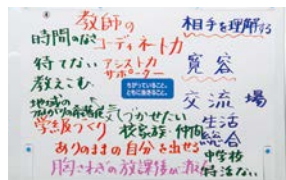
くる」、手島先生は「カリキュラム」と言っておられましたね。鹿毛先生、柘植先生、3人のご発言も含めながら、これからどんな教育を行っていけばいいのか、メッセージをお願いします。

●鹿毛 日本人はちがいに対する恐れがあって、ちがいを避けようとするメンタリティーがあるのですね。しかし、「みんながちがう」というところにデフォルト設定するような発想でやっていくということが必要だと思います。

そのためには、「ちがっていることを面白いがる」。例えば、他の子とちがう意見を言った子がいたときに、それを「なぜ?」と面白がり、それに対してコミュニケーションしようというメンタリティーがわれわれに求められているかなと。

さらに、今回、見直すべきと思ったのは、「お互いさま」ということば。「そういうことは自分





カラフルな色づかいだったり、付箋を使ったり。それぞれにグループの個性が表れています。

にもある」と思うと寛容になれるが、最近では、相手のミスをあげつらって、「お互いさま」から遠ざかっている。「お互いさま」は、本来は共感がベースで、日本文化の良いことばで、テーマにつながるキーワードだと思いました。

●**柘植** 時期や場面や教える内容によって、「何がしかのところで、何がしかの人たちを分ける」ということと、「分けないで一緒にやる」ということとの絶妙なバランスをどうとるかが、「ともに生きる」を実現するために必要なことだと思います。

以前、勤務先まで（通勤路は）一本道だったのですが、ゆっくり走りたいときに急いで来る車がいる。逆に、「遅れそうだ」と急ぐときに限って、おじいちゃんがゆっくり走っていらっしゃる（笑声）。2車線だったらいいのにと。

一方、海外のオスロ駅では、スピードのちがうエスカレー

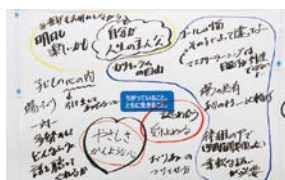
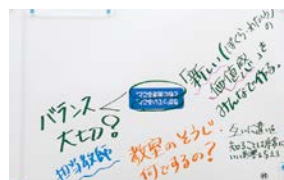
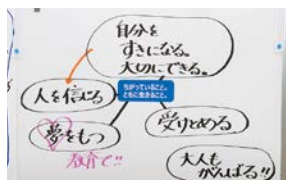
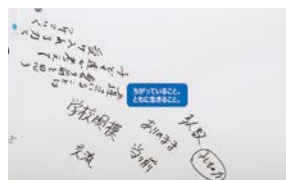
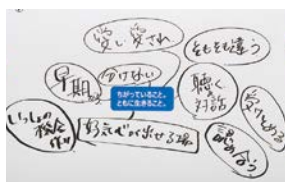
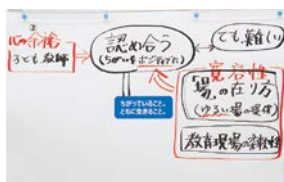
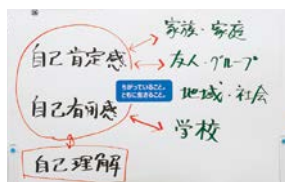
ターが2本ずつある。道路のつくりも、エスカレーターも、社会で生きていくことも、そうなのではないでしょうか、「分ける」ということと「一緒にする」ということの兼ね合いを、教育の中でどういうふうにもうまく実現していくのが大きな課題です。それを乗り越えないと、「何でもいからみんな一緒」にして、「でも、みんな苦労しているよ」と、誰も幸せではないのではないかと。それではいけないと思います。

●**嶋野** 二者択一には絶対ならない。ということは、相当知的レベルの高い社会をつくっていかなければいけない。

今回のテーマをもらったときから、金子みすゞさんの「みんなちがってみんないい」という詩が、ずっと私の中にひっかかっていた。ちがいはわかる、鳥と私と鈴と。でも、何が「いい」んだろうと。

そうした上で今日思ったのは、「ちがう」ということによって、それぞれの存在がはっきりしてくるということでした。鳥はきれいな声が出る、鈴は体をゆすって音を出す、わたしはいろんな歌を知っている。

そこで私なりに解釈すると、この「ちがっていること。ともに生きること。」というのは、「存在」という観点では絶対に平等でなくてはならない。そのためには、その人の持ち味や能力、文化などというものが不平等である（ちがう）ことを認めること。人間が人間である以上、どうしても差（ちがい）ができるわけで、それをきちんと認めることが、存在の平等をより明確にすることではないか。このように、自分の中で論理をつくりながら、今年も本当にいいテーマだったなあと思っています。ありがとうございます（拍手）



博報財団は次代を担う子どもたちの「豊かな人間性育成」の実現を目指して活動を行っています。

当財団は、株式会社博報堂が教育雑誌の広告取次業として1895年に創業以来、次代を担う児童の育成を重視して教育・文化面において行ってきた数々の支援事業の精神を引き継ぎ、1970年に財団法人博報児童教育振興会として設立されました。以来、次代を担う子どもたちの「豊かな人間性育成」の支援を目的に活動を行っています。新公益法人制度の施行に伴い、公益財団法人として認定され、2011年4月、博報財団(正式名称:公益財団法人博報児童教育振興会)としてスタートしました。

博報賞 — 教育現場の地道な努力を顕彰し、すぐれた実践の輪を広げます —

博報賞は、児童・生徒に対する日頃の教育現場で尽力されている、学校・団体・教育実践者を顕彰することを通して、児童教育の現場を活性化させることを目的としています。

フォーラム参加者の声をご紹介します

- 特別支援教育コーディネーターと、ユニバーサルデザインによる授業が両輪であることの具体を見せていただきました。
- 「アメラジアン」ということを初めて聞いた。本人の意思だけでなく、周りの意識を変えることは難しいと感じたが、それこそが「ともに生きる」ことだと思った。
- 優れた取り組みも継続しなければ意味がない。ESDの考えによる実践は、修正しながらやっていけるしかけと、新任でも実行できる工夫がなされていた。
- 日本各地の教育実践を知る良い機会だと思っています。今後もぜひ参加したい。
- さまざまな視点から1つのテーマをじっくり考えることができてよかった。アイデアや取り組みがとても参考になりました。
- 特別支援教育のあり方や行政の方針が、子どもの心に大きな影響を与えらると思うと、私自身がしっかりと発信していかなければと思いました。
- 自分の考えが「個」に向いていたことに気づいた。集団と個の両方に目を向けられるよう、柔軟でありたい。
- 自校での取り組みと似ている部分があったので、今日の提言を加えたら、より効果的な活動ができるだろうと感じました。
- 多様な意見の交流こそ、次の問題解決へのヒントがあると思う。
- 一人ひとりの子どもたちのニーズに対応することは難しいと考えていたが、それぞれの要望に対して、しっかり対応がなされていて感心した。
- 日ごろ感じていることを本音で話すことができる良い場だと思います。ちがっていることに「良さ」を見つける教育の実践が必要ですね。
- 今の教育界の動きや法制施行のことなどを知ることができ、教師としての今後の展望が持てました。心理学についてのご教授も役に立ちました。

編集後記

今回のテーマ検討は、「これからの厳しい社会の中で、個性や多様性のある様々な立場の子どもたちが、お互いの良さを活かしながら生きていくために必要なこととは何か」というところから始まりました。

博報教育フォーラムは、博報賞受賞者の優れた実践活動を紹介する場として開催していますが、今年は、特別支援教育、国際文化理解教育、教育活性化と、あえて部門の異なる受賞者に事例発表をお願いしました。

当日会場では、「これからどういう教育をしていけばいいのだろう」という投げかけに、「安心できる環境」「場をつくる」「カリキュラムをつくる」

など、パネリストそれぞれの立場からのご発言がありました。また、「ちがっていることを楽しむこと」「『分ける』ことと『一緒にする』ことの絶妙なバランスを教育の中でどう実現していくかが課題」といったこれからの教育に対するメッセージも挙げられていました。

フォーラムという一つの場に、異なる立場の人々が集い、その出会いが互いに新しい気づきを生む中で、テーマについて深め、今後の教育活動におけるヒントを参加された方々にお持ち帰りいただきましたら幸いです。

教育関係者、地域、保護者の方々に「ちがっていること。ともに生きること。」について考えただくためのヒントになればという想いを込めて、このレポートをお届けします。